

## 「神が…」

ヨハネの手紙 I

2:1~6

### はじめに

古来ラビと呼ばれるイスラエルの聖書学者たちは、聖書に記された言葉の意味を調べる際、「最初の言及」からその答えを導き出していました。つまりその言葉が聖書の中で最初に使われた箇所を目を留め、その言葉が使われた背景、出来事、そして目的がその言葉を表す最も基本となる意味であるという解釈です。たとえば「神」という言葉が聖書には数多く使われていますが、では「神」とは何か？その意味する最も基本となる答えを聖書の中で最初に「神」が記されている箇所を目を留め、そこから導き出すのです。「神」はヘブル語でエローヒーム(אֱלֹהִים)と言います。旧約聖書は最初ヘブル語で書かれましたので、ヘブル語で調べなければ正しい箇所を見つけることができないことがあるからです。幸いにもこの「神」という言葉（日本語）は、ヘブル語のエローヒームと同じ箇所です。

【新改訳改訂3】

創世記 1:1 初めに、神が天と地を創造した。

エローヒームは旧約聖書全体で 2602 回も使われていますが、この創世記 1:1 が聖書で最初に使われた箇所です。この御言葉から「神」とは、「初め」すなわち天と地が創造される前から存在し、そして天と地という二つの異なる世界を創造された御方であると言えます。そしてその事実から、「神」とは異なる二つのものを存在させる御方であるという答えを導き出すことができます。すなわち「神」は初めと終わり、光とやみ、男と女、神とイスラエル、キリストと教会、イスラエルと異邦人、汚れときよめ、善と悪、救いと滅びなど、聖書の中心テーマとなるものを常に二つの存在によって提示される御方であるということです。これが最初の言及から導き出される「神」エローヒームという言葉の持つ意味です。このように、聖書にある最初の記述から、それぞれの言葉の持つ、「本来の意味を捉える解釈法」があるということを知っていただきたいのです。そしてこの解釈方法は、以下の御言葉に基づいています。

【新改訳改訂3】

出エジプト記 13:2 「イスラエル人の中で、最初に生まれる初子はすべて、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それはわたしのものである。」

神にとって最初に生まれたもの、「初子」とは特別な、聖別されるべき存在であり、そして神のものであるということです。ですから神が人に与えられた御言葉である聖書にも「初子」となる言葉が存在し、「神のもの」としての、その御心、み旨を表す意味がそこに示されていると「特別に、聖別して」捉えるのです。

また聖書においてこの「初子」は「長子」とも言い換えられています。聖書に記された家庭の概念、当時のイスラエルの家庭において長子（長男）は、その父の家、家系を受け継ぐ跡継ぎであり、その家庭において最も重要な子どもでした。長子はその家を、その家系を絶えることがないように守る、保ち続けるための特別な存在なのです。イスラエルの家の長子は父親から遺産を相続する時、他の兄弟の2倍のものを受け取りました。ですからこの最初の言及による言葉の意味もまた、他の箇所では表される意味よりも2倍重要なものとして、最も重要な意味として捉える必要があると考えられます。

このような見解から、今回分かち合おうとしているヨハネの手紙第一2章からの記述を、ヘブル語による最初の言及を踏まえ、その視点から、記された言葉のその本来の意味を導き出し、そして捉え直しながら読み解いてみたいと思います。

## 1. 罪を犯す

【新改訳改訂3】

I ヨハネ

2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。

ヨハネはこの手紙を「あなたがたが罪を犯さないようになるため」に書いたと言っています。前回のやさしいになりますがこの「罪を犯す」とは、聖書が提示する本来の意味としては「神のご計画に対して盲目であること」を指し示しています。なぜなら「罪を犯す」ことを意味するヘブル語ハーター(חָטָא)、この最初の言及が以下のようなものだからです。

【新改訳改訂3】

創世記

20:2 アブラハムは、自分の妻サラのことを、「これは私の妹です」と言ったので、ゲラルの王アビメレクは、使いをやって、サラを召し入れた。

20:3 ところが、神は、夜、夢の中で、アビメレクのところに來られ、そして仰せられた。「あなたが召し入れた女のために、あなたは死ななければならない。あの女は夫のある身である。」

20:4 アビメレクはまだ、彼女に近づいていなかったので、こう言った。「主よ。あなたは正しい国民をも殺されるのですか。」

20:5 彼は私に、『これは私の妹だ』と言ったではありませんか。そして、彼女自身も『これは私の兄だ』と言ったのです。私は正しい心と汚れない手で、このことをしたのです。」

20:6 神は夢の中で、彼に仰せられた。「そうだ。あなたが正しい心でこの事をしたのを、わたし自身よく知っていた。それでわたしも、あなたがわたしに**罪を犯さ**ないようにしたのだ。それゆえ、わたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかったのだ。」

ゲラルの王アビメレクがアブラハムの妻であるサラを召し入れる、すなわち自分の妻にしようとする事、これが聖書で最初のハーター「罪を犯す」です。実際には神の介入があり犯行には及びませんでした、もしこれが実際に起こっていたとしたら、以下の神のご計画の成就に支障を来すことになっていました。

【新改訳改訂3】

創世記 17:19 すると神は仰せられた。「いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。」

神がアブラハムの子孫すなわちイスラエルの民との間に交わされた「永遠の契約」、この成就のためにはアブラハムとサラの間にイサクが生まれることが大前提だったのです。ゲラルの王アビメレクの行為はそれを妨げるものでした。ですから神はお怒りになり彼を殺そうとされます。しかしアビメレクはその事実を知りませんでした。そして何よりアブラハムが「これは私の妹です」と偽ったことによって、騙したが故に起こったものでした。ここにハーター「罪を犯す」ということの本来の意味が表されています。すなわち「罪を犯す」とは、①「神のアブラハムとその子孫に対する永遠の契約」に象徴される、「神のご計画を知らない」ということ、また②「偽り、誤った情報により騙されている」ことを指し示していると考えられます。一般的に「罪を犯す」とは人に危害を加えること、法律を破ることを指しますが、それらはすべて人が神のご計画に対して無知であるということ、そしてそれが「偽り」すなわち一般常識と呼ばれるこの世の価値観、あるいは自分の情欲、自己中心的な考えというものにすり替えられ、騙されていることが原因となっているということが言えます。つまり「あなたがたが罪を犯さないようになるため」には、神のご計画、神が何をなさそうとしておられるのかということに目を向け、そしてそれを知る、正確には神に教えていただくことが重要であり必要であるということなのです。

しかしアブラハムの偽りにより、ゲラルの王アビメレクが罪を犯しそうになったように、私たちは今日、多くの偽りの情報すなわち神のご計画に則していない、人間中心的な考えに基づいた情報のただ中にあり、その影響を常に受け続けています。また神がアビメレクに対してそうであったように、誰にでもそのご計画を明らかにされるといってもありません。つまり私たちは、常に罪を犯す環境に置かれており、言うならば罪を犯させられているということなのです。では私たちはどうしたら良いのでしょうか。そのヒントもこの「罪を犯す」ハーターが最初に記されたアブラハムとアビメレクの間で起こった出来事から得ることができます。騙されたとはいえ、アブラハムからその妻であるサラを奪ったアビメレクに対して、神はこのように仰せられました。

【新改訳改訂3】

創世記

20:7 今、あの人の妻を返していのちを得なさい。あの人は預言者であって、あなたのために祈ってくれよう。しかし、あなたが返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことをわかまえなさい。」

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神はアビメレクとその妻、および、はしためたちをいやされたので、彼らはまた子を産むようになった。

20:18 【主】が、アブラハムの妻、サラのゆえに、アビメレクの家すべての胎を堅く閉じておられたからである。

アビメレクはサラをアブラハムに返し、牛と羊の群れ、男女の奴隷、銀千枚を与え、また彼の領地で自由に住むことを許可しました。そこでアブラハムは彼のために「預言者」として祈ったとあります。この「アブラハムの祈り」によるとりなし、弁護によってゲラルの王アビメレクは神に赦され、彼とその民は死を免れ「いのちを得た」のです。ここに聖書で最初に記された、罪の赦しが描かれています。それはすなわち、①アブラハムを預言者すなわち神の選ばれた者と認め、彼によってなされる神のご計画を祝福するということ、そして②アブラハムの祈りに表された、預言者のとりなし、弁護によって罪が赦されるということです。しかしこの出来事はあくまで「型」です。神のご計画を成し遂げ、私たちのすべての罪を赦すためにとりなし、「御の前で弁護する方」は「義なるイエス・キリスト」、イエシュアであると筆者であるヨハネは述べているのです。このように、ヨハネは「罪を犯す」ことについて、聖書における最初の言及からその意味と解釈を述べていると考えられます。

## 2. 世全体のなだめ

2:2 この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。

さらにヨハネは罪を犯す私たちの弁護者としてのイエシュアを「私たちの罪だけでなく、世全体のための…なだめの供え物」と述べています。この「世全体」という言葉は何でしょうか。全世界または全人類という意味に捉えられる言葉ですが、ヘブル語ではオーラーム(אֱלֹהִים)と言い、創世記 3:22 で最初に使われる言葉です。

### 【新改訳改訂3】

創世記 3:22 神である【主】は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、**永遠に生きないように。**」

この箇所は人類最初の人であるアダムとその妻エバが、サタンに騙され、神のご命令に背き、食べてはならないと言われた善悪を知る知識の木の実を食べてしまったことによるものですが、ここで「いのちの木からも取って食べ、『永遠に』生きないように」と訳されている部分に最初のオーラームがあります。このように、「世全体」と訳されたオーラームの持つ本来の意味は「永遠（に生きる）」です。つまり「私たちの罪が赦され、私たちが『永遠に生きる』者となるための…なだめの供え物」と訳することができます。この解釈は先ほどの創世記 20:7 で神がアビメレクに対して「いのちを得なさい」と言われたこととも繋がってきます。神が言われるいのちとは、やがて死んで終わってしまういのちではなく、オーラーム「永遠に生きる」いのちのことではなくて何でしょう。また「世全体のための…なだめの供え物」の「なだめ(る)」という言葉の最初の言及を見てみましょう。「なだめる」はヘブル語でカーファル(כָּפַר)と言います。

### 【新改訳改訂3】

創世記 6:14 あなたは自分のために、ゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟に部屋を作り、内と外とを木のやいで**塗り**なさい。

このように「なだめる」と訳されたカーファルは、最初の言及ではなんと「塗る」と訳されています。この箇所は有名な「ノアの箱舟」の出来事を記した一節ですが、ノアはゴフェルの木で巨大な箱舟を造るよう神から命じられます。そしてその箱舟の「内と外とを木のやにて塗りなさい」という部分に最初のカーファルが使われています。箱舟にカーファル「塗ら」れた木のやには、組み合わせられた木と木を繋ぐ接着剤の役目を果たし、またその繋ぎ目の隙間を塞いで船内に水が入らないようにする防水の役目を果たしたと考えられます。つまり木のやにを「塗ら」なければ、箱舟が組み立てられても、大洪水の中に沈没し、バラバラに破壊されてしまうということです。ですから本来のカーファルとは、箱舟を守る、すなわち箱舟の中に入ったノアとその家族、そして選ばれた動物たちのいのちを守ったように、死と滅びを免れ「いのちを得させる」という意味があると考えられます。ですから「世全体のための…なだめの供え物」とは、ヘブル語の最初の言及の視点で見ると、「滅びを免れ、永遠に生きるための供え物」と訳すことができ、それが「義なるイエス・キリスト」、イエシュアであると言うことができます。

### 3. 命令を守る

2:3 もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。

2:4 神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。

神を信じる者であるならば誰でも、実際にはできなくても「神の命令を守る」者でありたいと願うのが普通ですが、本来のこの言葉の持つ意味とは一体どのようなものだったのでしょうか。最初の言及を見てみましょう。まず「(神の) 命令」のことをヘブル語でミツヴァー(מִצְוָה)と言い、ツァーヴァー(צַוָּה)「命じる」という意味の動詞から派生してできた言葉です。ですからミツヴァーよりもこのツァーヴァーについての最初の言及を見る方が、より正確な意味を捉えることができると思われます。また「守る」という意味のヘブル語はシャーマル(שָׁמַר)です。実はこのツァーヴァーとシャーマルの最初の言及は、どちらも同じ出来事の中にあります。

#### 【新改訳改訂3】

#### 創世記

2:15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

2:16 神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。」

創世記に描かれた、神の最初にして最高の傑作である「エデンの園」。本来人とはこの園に置かれ、耕し、守るために創造された存在だと言えます。そしてこの「エデンの園」において、神は人に最初のツァーヴァー「命じる」ことをされました。それに対し人は、その神が「命じ」られたことを「守る」ために置かれた、創造された存在であると言えます。このように、神は「命じ」られ、そして人はそれを「守る」、これが「エデンの園」に表された、本来あるべき神と人との関係であり交わりの形です。最初の人であったアダムはこれを「守る」ことができませんでした。しかしたった一度の過ちであるにも関わらず、「エ

デンの園」を追い出されてしまいました。このように神の提示しておられる「命令を守る」ということの基準は非常に高く、人が努力して何とかできるようなものではないことをまず知ってください。

#### 4. 神の愛

2:5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。

「神の命令を守る者」のことがここでは「みことばを守る者」と言い換えられています。そしてそのような者には「神の愛が全うされている」と述べられています。「(神の) 愛」これをヘブル語でアハヴァー(אהבה)と言い、アーハヴ(אהב)「愛する」という動詞が語源です。この最初の言及は創世記 22:2 です。

【新改訳改訂3】

創世記

22:1 これらの出来事の後、神はアブラハムを試練に会わせられた。神は彼に、「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は、「はい、ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

アブラハムはアーハヴ「愛する」ひとり息子のイサクを、全焼のいけにえとしてささげるよう命じられました。ただの息子ではありません。アーハヴ「愛する」一人息子です。愛するがゆえに、それを殺してささげよと神はお命じになりました。このようにアーハヴの最初の言及が示す「愛する」とは、守ることで与えることでも助けることでもなく、「殺す」こと、そして「(神に) ささげる」ことであると言えます。つまり「神の愛」とは、神の愛する一人子であるイエシュアを殺すこと、すなわち十字架の死であり、そして「ささげる」こと、これはアラー(אלה)と言い、本来は「上がる、昇る」という意味で、それはすなわちイエシュアのみがえりと昇天を指し示していると考えられます。そしてそれが「(神の愛が) 全うされる」ためには、絶対に必要な条件があります。それはこの「全うされる」という意味のヘブル語、シャーレーム(שלם)の最初の言及に示されています。

【新改訳改訂3】

創世記

44:1 さて、ヨセフは家の管理者に命じて言った。「あの人々の袋を彼らに運べるだけの食糧で満たし、おのおのの銀を彼らの袋の口に入れておけ。

44:2 また、私の杯、あの銀の杯を一番年下の者の袋の口に、穀物の代金といっしょに入れておけ。」彼はヨセフの言いつけどおりにした。

44:3 明け方、人々はろばといっしょに送り出された。

44:4 彼らが町を出てまだ遠くへ行かないうちに、ヨセフは家の管理者に言った。「さあ、あの人々のあとを追え。追いついたら彼らに、『なぜ、あなたがたは悪をもって善に報いるのか。』

44:5 これは、私の主人が、これで飲み、また、これでいつもまじないをしておられるのではないか。あなたがたのしたことは悪らつだ』と言うのだ。」

44:6 彼は彼らに追いついて、このことばを彼らに告げた。

この描写は、アブラハムの子イサクの子ヤコブの12人の息子たちの間に起こったものですが、彼らの11番目の息子のヨセフは兄弟たちの悪だくみによってエジプトの奴隷となりましたが、神のご計画と導きによりそのエジプトで王に次ぐ地位を得ました。そうとは知らない兄弟たちがヨセフによって試される一場面です。ヨセフの兄弟たちはエジプトに食料を買いにやって来たのですが、エジプトの宰相であったヨセフは、彼らが支払った代金をこっそりと全額返し、さらに自分の杯をもその中に入れるように命じました。つまり彼らに濡れ衣を着せ、泥棒に仕立て上げたのです。「なぜ、あなたがたは悪をもって善に報いるのか」とは、そのような背景のもとで語られた言葉で、ここで「報いる」と訳されているのが聖書で最初のシャーレームです。このように、シャーレームには「悪をもって善に報いる」者にされる、悪者に仕立て上げられ、罪を犯させられる、という意味があると考えられます。

私たちは普通、人が罪を犯したために、その罪の身代わりとして罰を受けられるためにイエシュアは十字架にかかれ、そして死んでくださったと考えます。しかしこの解釈には大きな問題点があります。それは、この解釈では、まるで人の罪によって神のご計画が始まった、つまり人によって引き起こされ、誘発的に始まったご計画ということになり、すなわち「神が」ではなく「人が神を動かした」計画ということになってしまいます。これでは人の尻ぬぐいをする神、人を助ける神、人のための神となってしまいます。先ほど述べたように、神は「命じ」、人はそれを「守る」、これが神と人のあるべき関係、交わりの形です。決して人に動かされる神、人に従う神ではないのです。ですからこれらのヘブル語の最初の言及から、このように解釈することができます。「神の愛が全うされている」とは、神の御子イエシュアが、十字架にかかれて死に、そしてよみがえられ、天に上るために、人はあえて罪ある者とされたということです。神が私たちを罪人に仕立て上げたと聞いて、誰も良い気はしないでしょう。しかしローマ人への手紙でパウロがこのように述べています。

【新改訳改訂3】

ローマ人への手紙

9:18 こういうわけで、神は、人を見こころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。

9:19 すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう。」

9:20 しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか」と言えるでしょうか。

9:21 陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。

9:22 ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。

9:23 それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためになのです。

9:24 神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。

私たちはもっと、さらにもっとこの神の御前に低く、へりくだらなければなりません。人のために神があるのではありません。神がご自身のために天と地を、人を創造されたのです。ですから神のご計画は、人の罪や人の意志によって、人の要求に対して応答して救済的に引き起こされたもの、何とかしなければならぬ状況になってしまったので誘発され触発されたように始められたものではなく、天地創造の前から、永遠の昔から、ただ神の御意思、御心のみによって計画され、始められ、その為に御子であるイエシュアを遣わされ、そしてそのイエシュアによって完成させられるものなのです。ですからヨハネはここで「私たちのうちに神がおられる」とは言わず「**私たちが神のうちにいる**」と述べているのだと考えられます。

## 5. キリストの歩み

2:6 神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。

では私たちが「神のうちにいる」、「(神のうちに) とどまる」とはどういう意味でしょうか。ここで「とどまる」と訳されているヘブル語はアーマド(אָמַד)と言います。この最初の言及から考えてみましょう。

【新改訳改訂3】

創世記

18:1 【主】はマムレの檜の木のそばで、アブラハムに現れた。彼は日の暑いころ、天幕の入口にすわっていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。彼は、見るなり、彼らを迎えるために天幕の入口から走って行き、地にひれ伏して礼をした。

18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、それに、料理した子牛を持って来て、彼らの前に供えた。彼は、木の下で彼らに**給仕をしていた**。こうして彼らは食べた。

ここで三人の人としてアブラハムのもとを訪れた「主」をアブラハムが手厚くもてなした場面で、アブラハムが「彼らに『給仕をしていた』」と訳されているのが聖書で最初のアーマドです。このようにアーマドとは本来「(アブラハムが) 主を迎える、ひれ伏す、もてなす、仕える」という意味があると言えます。そしてそのような者は「**キリストが歩まれたように**」歩むとヨハネは述べています。ここで「歩む、歩く」と訳されているヘブル語はハーラフ(הָלַךְ)と言います。これも最初の言及を見てみましょう。

【新改訳改訂3】

創世記

2:14 第三の川の名はティグリス。それはアシュルの東を**流れる**。第四の川、それはユーフラテスである。

2:15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

このようにハーラフの本来の意味は「歩く」ではなく川が「流れる」です。川はどこでも自由に流れてはいきません。地形や川筋に沿って流れて行きます。川の水は自力でがんばって進んでいるのではありません。まさにただ「流されて」いるのです。ですから「**キリストが歩まれたように**」とは、イエシュアもまた神が定められたご計画という名の川筋に沿って、従ってハーラフ「流された」その身を委ねられたということです。このハーラフの最初の言及の次に **2:15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。**という記述があることもこのハーラフにつながる意味があると考えられます。すなわち神が人を取り、置いて、させるから人はただそれに身を委ねる「流される」ということです。それが「**キリストが歩まれたように**」歩むことであると考えられます。

つまり私たち「人が」自分でイエシュアのように歩もうとするのではなく、「神が」ご自分のものとしてお選びになった人を「取り」必ず用いられるということです。聖書の中には自分の意に反して、不本意ながら神に用いられた人が数多く記されています。神はご自分が用いようと思う者は絶対に用いられるのです。ですから主体性、主導権はあくまでもただこの神のみにあり、人にはそれが一切与えられていないことを覚えなければなりません。

ですからあなたが今どんな状況、状態であったとしても、自分は神の御前に何の役にも立たないとは思わないでください。神は用いると決められた者は必ず用いられます。またたとえあなたが「神様、～のことに、～のために私を（または～を）用いてください。」と願い求めても、決してあなたの思い通りにはならないことを覚えましょう。誰をいつどこで何に用いられるのか、それらのことはすべて神がお決めになることです。いずれにせよあなたは自分について、また人について思う時、いつでも神の御前に低くあってください。そして神にはご計画があり、そのために全てを支配し、人も宇宙も悪魔でさえも、ただその御心のままに動かしておられることを覚え、ただ神の御心だけがなるようにと祈りましょう。